

References

Gradshteyn, I., & Ryzhik, I. 2014, Table of Integrals, Series, and Products (Academic Press), doi:<https://doi.org/10.1016/C2010-0-64839-5>

3 Problems (Section 3)

3.1 Hints

3.1 方位角対称なポテンシャルを Legendre 多項式で展開したときの一般形

$$\Phi(r, \theta) = \sum_{l=0}^{\infty} (A_l r^l + B_l r^{-(l+1)}) P_l(\cos \theta) \quad (3.1)$$

に代入して、境界条件から各係数 A_l, B_l を決定する。

3.2 (a) (3.1) のように展開して、表面電荷密度による境界条件を考えれば良い。
また、Legendre 多項式の直交関係式

$$\int_{-1}^1 dx P_l(x) P_l(x) = \frac{2}{2l+1} \delta_{ll} \quad (3.2)$$

および負の引数をとる場合の式

$$P_l(-x) = (-1)^l P_l(x) \quad (3.3)$$

を用いなければならない。

(b) $E = -\nabla \Phi$ を用いて原点での電場を計算できる。また、 $\hat{z} = \cos \theta \hat{r} - \sin \theta \hat{\theta}$ を用いると、結果を \hat{z} のみで表すことができる。

(c) (2) では $\beta = \pi - \alpha$ として $\beta \rightarrow 0$ の極限を考えるほうがやりやすい。

3.3 後で

3.4 (a) ポテンシャルを球面調和関数で展開する。

$$\Phi(r, \theta, \phi) = \sum_{l=0}^{\infty} \sum_{m=-l}^l (A_{lm} r^l + B_{lm} r^{-(l+1)}) Y_{lm}(\theta, \phi) \quad (3.4)$$

である。境界条件は $r = a$ の球面上で考えれば良い。 ϕ の値でポテンシャルを場合分けして考えると見通しが良い。

(b) (a) の結果を用いて具体的な計算をするだけ。本文 §3.3 中の式 (3.36) との比較のときには、座標軸の取り方に注意をする必要がある。具体的には $\cos \theta' = \sin \theta \sin \phi$ である。

3.5 本文中の式 (3.70) を r, a でそれぞれ微分、差を考えて $d\Omega' V(\theta', \phi')$ で積分をすればよい。

3.6 ポテンシャルが具体的に計算できるので、本文中の式 (3.70) を使って球面調和関数で展開した後に、和を考えれば良い。

3.7 前問と同じように考えれば良い。

3.8 $\log(\csc \theta) = \log(1/\sin \theta)$ を Legendre 多項式で展開する。積分

$$\int dx \log(1-x^2) = (1+x) \log(1+x) - (1-x) \log(1-x) - 2x \quad (3.5)$$

を使うと見通しが良い。

3.9 円筒座標系での Laplacian は

$$\nabla^2 = \frac{1}{\rho} \frac{\partial}{\partial \rho} \left(\rho \frac{\partial}{\partial \rho} \right) + \frac{1}{\rho^2} \frac{\partial^2}{\partial \phi^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2} \quad (3.6)$$

である。これを $z = 0, L$ での境界条件に注意して解けばよい。

3.10 前問の結果を用いる。(b) での極限を考えるときは、漸近形

$$I_\nu(z) \sim \frac{1}{\sqrt{z}} \left(\frac{z}{2} \right)^\nu + \mathcal{O}(z^{\nu+1}) \quad \text{for } z \ll 1 \quad (3.7)$$

を用いるとよい。三角関数の無限和は \exp での無限級数として考えると見通しが良い。

3.11 あとで

3.12 Bessel 関数に関する公式

$$\int_0^\infty dx e^{-\alpha x} J_0(bx) = \frac{1}{\sqrt{\alpha^2 + b^2}} \quad (3.8)$$

$$\int_0^\infty dx e^{-\alpha x} [J_0(bx)]^2 = \frac{2}{\pi \sqrt{\alpha^2 + 4b^2}} K \left(\frac{2b}{\sqrt{\alpha^2 + 4b^2}} \right) \quad (3.9)$$

が知られている。ここで、 $K(k)$ は第一種完全楕円積分

$$K(k) = \int_0^{\pi/2} \frac{d\theta}{\sqrt{1-k^2 \sin^2 \theta}} \quad (3.10)$$

である。

3.13 Legendre 多項式の積分について

$$\int_0^1 dx P_l(x) = \begin{cases} 1 & \text{if } l=0 \\ \frac{(-1)^k (2k-1)!!}{2^{k+1} (k+1)!} & \text{if } l=2k+1; k=0, 1, \dots \\ 0 & \text{if } l=2k; k=1, 2, \dots \end{cases} \quad (3.11)$$

が知られている。

3.14 線電荷密度を求めてそれを体積電荷密度として書けば良い。

3.15 あとで

3.16 (a) デルタ関数は

$$\lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \delta_\varepsilon(x) = \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \frac{\sin(x/\varepsilon)}{x/\varepsilon} \frac{1}{\pi \varepsilon} = \delta(x) \quad (3.12)$$

とかける。

(b) 基本的には本文 §3.11 の議論と同様にすれば良い。

(c) (b) の結果を用いる。

(d) Bessel の積分表示

$$J_n(x) = \frac{1}{\pi} \int_0^\pi d\theta \cos(n\theta - x \sin \theta) \quad (3.13)$$

$$= \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} d\theta \cos(n\theta - x \sin \theta) \quad (3.14)$$

および Hansen の積分表示

$$J_n(x) = \frac{1}{i^n \pi} \int_0^\pi e^{ix \cos \theta} \cos(n\theta) \quad (3.15)$$

がある。

3.17 (a) Fourier 展開、あるいは Fourier 半区間展開により

$$\delta(\phi - \phi') = \frac{1}{2\pi} \sum_{m=-\infty}^{\infty} e^{im(\phi - \phi')} \quad (3.16)$$

$$\delta(z - z') = \frac{2}{L} \sum_{n=1}^{\infty} \sin\left(\frac{n\pi z}{L}\right) \sin\left(\frac{n\pi z'}{L}\right) \quad (3.17)$$

がわかる。

(b) 問題 3.16(a) の結果を用いて ρ, ϕ 方向について展開をした後、 z 方向について Green 関数の満たすべき条件を考える。

3.18 (a) 円筒関数系での Laplace 方程式を境界条件

$$\begin{cases} \Phi = 0 & \text{on } z = 0 \\ \Phi = V\theta(a - \rho) & \text{on } z = L \end{cases} \quad (3.18)$$

で解く。ただし $\theta(\cdot)$ は Heaviside の階段関数。

(b) Bessel 関数、sinh 関数を級数展開して、最低次の寄与を計算する。

(c) (b) と同様に考える。

3.19 Gradshteyn & Ryzhik (2014) の式 (6.666) より

$$\int_0^\infty dx x^{\nu+1} \frac{\sinh(\alpha x)}{\sinh(\pi x)} J_\nu(\beta x) = \frac{2}{\pi} \sum_{n=1}^{\infty} (-1)^{n-1} n^{\nu+1} \sin(n\alpha) K_\nu(n\beta) \quad (3.19)$$

for $|\Re(\alpha)| < 1, \Re(\nu) > -1$

が成り立つ。

3.20 問題 3.17 で考えた Green 関数を用いることができる。

3.21 問題 1.18(b) の結果を用いる。また、Gradshteyn & Ryzhik (2014) 式 (6.554) より

$$\int_0^1 dx \frac{x}{\sqrt{1-x^2}} J_0(xy) = \frac{\sin y}{y} \quad \text{for } y > 0 \quad (3.20)$$

である。

3.22 あとで

3.23

3.2 Answers

3.1

半径 a, b の球の間の領域のポテンシャルを考え
る。Legendre 多項式による展開

$$\Phi(r, \theta) = \sum_{l=0}^{\infty} (A_l r^l + B_l r^{-(l+1)}) P_l(\cos \theta) \quad (3.21)$$

を以下の境界条件で考える：

$$\Phi(a, \theta) = \begin{cases} V & \text{if } 0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{2} \\ 0 & \text{if } \frac{\pi}{2} \leq \theta \leq \pi \end{cases}, \quad (3.22)$$

$$\Phi(b, \theta) = \begin{cases} 0 & \text{if } 0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{2} \\ V & \text{if } \frac{\pi}{2} \leq \theta \leq \pi \end{cases} \quad (3.23)$$

(3.22) について、 $P_l(\cos \theta) d(\cos \theta)$ をかけて $\theta \in [0, \pi]$ で積分をすると、

$$\int_{\cos \theta = -1}^{\cos \theta = 1} \sum_{l=0}^{\infty} (A_l a^l + B_l a^{-(l+1)}) P_l(\cos \theta) P_{l'}(\cos \theta) d(\cos \theta) \\ = V \int_{\cos \theta = 1}^{\cos \theta = 0} P_{l'}(\cos \theta) d(\cos \theta) \quad (3.24)$$

である。左辺の積分変数を x で書くと、

$$(\text{L.H.S.}) = \int_1^{-1} \sum_{l=0}^{\infty} (A_l a^l + B_l a^{-(l+1)}) P_l(x) P_{l'}(x) dx \quad (3.25)$$

であり、Legendre 多項式に関する直交関係 (3.2) より、 (l, l') を入れ替えて

$$A_l a^l + B_l a^{-(l+1)} = \frac{V(2l+1)}{2} \int_0^1 dx P_l(x) \quad (3.26)$$

を得る。同様に考えて、(3.23) について、

$$A_l b^l + B_l b^{-(l+1)} = (-1)^l \frac{V(2l+1)}{2} \int_0^1 dx P_l(x) \quad (3.27)$$

が成り立つ。ただし、 $P_l(-x) = (-1)^l P_l(x)$ に注意せよ。

式 (3.26) と (3.27) より、係数 A_l, B_l を計算することができて、

$$A_l = \frac{(-1)^l b^{l+1} - a^{l+1}}{b^{2l+1} - a^{2l+1}} \frac{V(2l+1)}{2} \int_0^1 dx P_l(x), \quad (3.28)$$

$$B_l = \frac{b^l - (-1)^l a^l}{b^{2l+1} - a^{2l+1}} a^{l+1} b^{l+1} \frac{V(2l+1)}{2} \int_0^1 dx P_l(x) \quad (3.29)$$

がわかる。したがって、ポテンシャルの正確な形は

$$\Phi(r, \theta) = V \sum_{l=0}^{\infty} \left(\frac{(-1)^l b^{l+1} - a^{l+1}}{b^{2l+1} - a^{2l+1}} r^l + \frac{b^l - (-1)^l a^l}{b^{2l+1} - a^{2l+1}} a^{l+1} b^{l+1} r^{-(l+1)} \right) \\ \times \frac{2l+1}{2} \left(\int_0^1 dx P_l(x) \right) P_l(\cos \theta) \quad (3.30)$$

である。具体的に $l=4$ の項までを書き下せば、

$$\Phi(r, \theta) = V \left[\frac{1}{2} + \frac{3}{4} \frac{-(a^2 + b^2)r + a^2 b^2 (a+b)r^{-2}}{b^3 - a^3} P_1(\cos \theta) \right. \\ \left. - \frac{7}{16} \frac{-(a^4 + b^4)r^3 + a^4 b^4 (a^3 + b^3)r^{-4}}{b^7 - a^7} P_3(\cos \theta) + \dots \right] \quad (3.31)$$

となる。

$b \rightarrow \infty$ の極限では $a/b \rightarrow 0, r/b \rightarrow 0$ として、

$$\Phi(r, \theta) = V \sum_{l=0}^{\infty} \frac{2l+1}{2} \left(\frac{a}{r} \right)^{l+1} \left(\int_0^1 dx P_l(x) \right) P_l(\cos \theta) \\ = V \left[\frac{1}{2} + \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^k (4k+3)(2k-1)!!}{2^{k+2}(k+1)!} \left(\frac{a}{r} \right)^{2k+2} P_{2k+1}(\cos \theta) \right] \quad (3.32)$$

$$= V \left[\frac{1}{2} + \frac{3}{4} \left(\frac{a}{r} \right)^2 P_1(\cos \theta) - \frac{7}{16} \left(\frac{a}{r} \right)^4 P_3(\cos \theta) + \dots \right] \quad (3.33)$$

である。ただし、ここでは $(-1)!! = 1$ と約束する。これは半径 a の導体球について、北半球のポテンシャルが V 、南半球が接地されており、さらに無限遠でのポテンシャルの境界条件が $V/2$ となる系において、導体球の外部領域に作るポテンシャルに等しいことがわかる。

$a \rightarrow 0$ の極限では

$$\Phi(r, \theta) = V \sum_{l=0}^{\infty} (-1)^l \frac{2l+1}{2} \left(\frac{r}{b} \right)^l \left(\int_0^1 dx P_l(x) \right) P_l(\cos \theta) \\ = V \left[\frac{1}{2} + \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^{k+1} (4k+3)(2k-1)!!}{2^{k+2}(k+1)!} \left(\frac{r}{b} \right)^{2k+1} P_{2k+1}(\cos \theta) \right] \quad (3.34)$$

$$= V \left[\frac{1}{2} - \frac{3}{4} \left(\frac{r}{b} \right) P_1(\cos \theta) + \frac{7}{16} \left(\frac{r}{b} \right)^3 P_3(\cos \theta) \right] \quad (3.35)$$

である。これは、半径 b の導体球について、北半球が接地されていて、南半球のポテンシャルが V となるような系における、球内部のポテンシャルに等しいことがわかる。それぞれの場合について、ポテンシャルを描くと図 1-3 のようになる¹⁾。

3.2

極角 θ が $\theta < \alpha$ を満たす部分には電荷が存在せず、その他の部分には一様な電荷密度 $\sigma_c = Q/(4\pi R^2)$ が存在するような球を考える。

(a) ポテンシャルを Legendre 多項式で展開して

$$\Phi(r, \theta) = \sum_{l=0}^{\infty} (A_l r^l + B_l r^{-(l+1)}) P_l(\cos \theta) \quad (3.36)$$

とする。球の内部で $r \rightarrow 0$ としたときに発散しない条件より $l=0, 1, \dots$ について $B_l = 0$ また、球の外部的については $r \rightarrow \infty$ としたときにポテンシャルがゼロに漸近するとして、 $l=0, 1, \dots$ について $A_l = 0$ である。したがって、球の内外でのポテンシャル Φ_{in} および Φ_{out} は

$$\Phi_{\text{in}}(r, \theta) = \sum_l A_l r^l P_l(\cos \theta), \quad (3.37)$$

$$\Phi_{\text{out}}(r, \theta) = \sum_l B_l r^{-(l+1)} P_l(\cos \theta) \quad (3.38)$$

とかける。ポテンシャルは $r=R$ の球面上で連続であるから、

$$\sum_l A_l R^l P_l(\cos \theta) = \sum_l B_l R^{-(l+1)} P_l(\cos \theta) \quad (3.39)$$

であり、 $\{P_l\}_{l=0,1,2,\dots}$ が直交関数系をなすことより $B_l = A_l R^{2l+1}$ である。

また、電場の接続条件は

$$\sigma = \epsilon_0 \left[\frac{\partial \Phi_{\text{in}}}{\partial r} \Big|_{r=R} - \frac{\partial \Phi_{\text{out}}}{\partial r} \Big|_{r=R} \right] = \begin{cases} \frac{Q}{4\pi R^2} & \text{if } \theta \geq \alpha \\ 0 & \text{if } 0 \leq \theta < \alpha \end{cases} \quad (3.40)$$

である。

$$\frac{\partial \Phi_{\text{in}}}{\partial r} \Big|_{r=R} - \frac{\partial \Phi_{\text{out}}}{\partial r} \Big|_{r=R} = \sum_{l=0}^{\infty} A_l (2l+1) R^{l-1} P_l(\cos \theta) \quad (3.41)$$

に注意すると、 $d(\cos \theta) P_l(\cos \theta)$ をかけて $\cos \theta = 1$ から $\cos \theta = -1$ で積分をすると、直交関係より以下が得られる (l, l' の入れ替えを行った)；

$$A_l = \frac{Q}{8\pi \epsilon_0} \frac{1}{R^{l+1}} \int_{-1}^{\cos \alpha} dx P_l(x). \quad (3.42)$$

Legendre 多項式に関する漸化式

$$\frac{dP_{l+1}}{dx} - \frac{dP_{l-1}}{dx} = (2l+1)P_l \quad (3.43)$$

より、

$$\int_{-1}^{\cos \alpha} dx P_l(x) = \frac{1}{2l+1} [P_{l+1}(\cos \alpha) - P_{l-1}(\cos \alpha)] \quad (3.44)$$

である ($P_{l+1}(-1) - P_{l-1}(-1) = 0$ であることに注意せよ)。したがって、

$$A_l = \frac{Q}{8\pi \epsilon_0} \frac{1}{2l+1} [P_{l+1}(\cos \alpha) - P_{l-1}(\cos \alpha)] \frac{1}{R^{l+1}} \quad (3.45)$$

であり、球内部のポテンシャルは

$$\Phi_{\text{in}}(r, \theta) = \frac{Q}{8\pi \epsilon_0} \sum_{l=0}^{\infty} \frac{1}{2l+1} [P_{l+1}(\cos \alpha) - P_{l-1}(\cos \alpha)] \frac{r^l}{R^{l+1}} P_l(\cos \theta) \quad (3.46)$$

と表される。また、球外部のポテンシャルについては、

$$\Phi_{\text{out}}(r, \theta) = \frac{Q}{8\pi \epsilon_0} \sum_{l=0}^{\infty} \frac{1}{2l+1} [P_{l+1}(\cos \alpha) - P_{l-1}(\cos \alpha)] \frac{R^l}{r^{l+1}} P_l(\cos \theta) \quad (3.47)$$

と表される。

(b) 電場は $\mathbf{E} = -\nabla \Phi$ で与えられるので、

1) 描画のときに使用したコードは .ipynb 形式で保存してある。

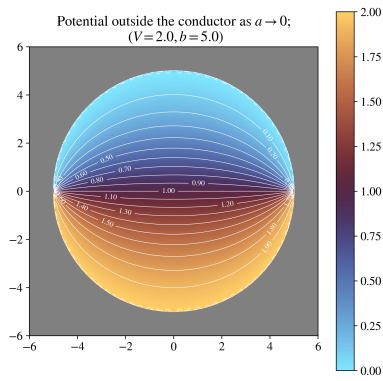
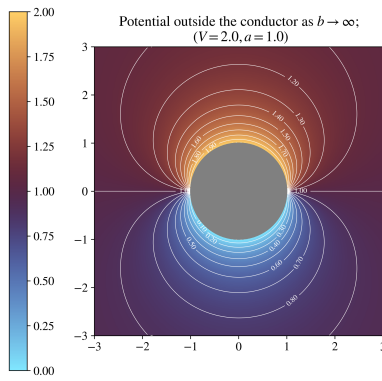
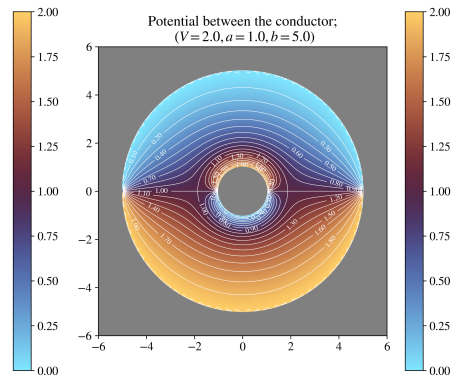
FIGURE 1. — $a \rightarrow 0$ としたときFIGURE 2. — $b \rightarrow \infty$ としたとき

FIGURE 3. — 一般の場合についてのポテンシャル